

【事例紹介】

## 静岡県立大学 US-COIL のとりくみ

### -日本語 COIL と国内 COIL-

COIL Activities at University of Shizuoka (US-COIL):

Japanese COIL and Domestic COIL

静岡県立大学 国際交流センター副センター長/国際関係学部教授 澤崎 宏一

SAWASAKI Koichi

(Associate Director, International Affairs Center/ Professor, School of International Relations,  
University of Shizuoka)

キーワード：COIL、日本語 COIL、国内 COIL、地方大学の COIL、海外の大学

#### 1. 静岡県立大学 US-COIL のはじまり<sup>1</sup>

静岡県立大学では、2018 年度より COIL 型教育のとりくみを始めている。これは、文部科学省による「大学の世界展開力強化事業～COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～」に本学が採択されたことに端を発する。このとりくみは、上智大学、お茶の水女子大学、そして本学の3校による共同事業であり、2018 年度から 2022 年度までの5 年度にわたり、日米間で COIL を実践・充実させることを目的としている。現在本学では、日米間の COIL を主軸としながら、その他の地域との COIL 交流も広げるべく活動中である。<sup>2</sup>

このとりくみが始まるまでは、本学での COIL に対する認知度は低かった。COIL が Collaborative Online International Learning の略であることも、ICT ツールを活用した国際間の双方向授業・協働学習であることも、そしてそれが具体的に何を意味するのかも、詳しい知識のある教職員はほとんどおらず、これを書いている筆者も例外ではなかった。<sup>3</sup> そのような中、上記事業の採択を機に、本学の英語名である University of Shizuoka から US-COIL と名づけて COIL 型教育に向けての準備が急ぎよ始められた。先陣を切って US-COIL に挑戦した教職員達は、さまざまな苦労や試行錯誤を重ねて授業

<sup>1</sup> US-COIL のとりくみは、本学 HP で随時更新している (<https://www.us-coil.jp/>)。

<sup>2</sup> ただし、2018 年度は準備期間であったため、COIL が本格的に始まったのは 2019 年度からである。

<sup>3</sup> COIL に関する基本的な説明は、本誌 2016 年 10 月号の関西大学池田佳子氏による論考記事や、関西大学発行の I-PAPER (2019 年 4 月号等) などに詳しい。

を計画しなければならず、順風満帆な船出というわけにはいかなかった。

以下では、このような形で始まった US-COIL の考え方と内容を事例と共に報告する。国際化の先端を行く大学が実践するような、華々しい事例報告ではないかもしれない。しかし、国際化教育の資源が決して豊かとは言えない地方大学が、どのように COIL 型教育に向き合えるかという点において、本報告は有益な情報を提示できると信じる。次節では本学の国際化教育の現状を記し、3 節では US-COIL の具体例を日本語 COIL、国内 COIL、通常 COIL の視点から紹介する。なお、今年はコロナ禍により多くのことが例年とは異なる事態となっているが、本稿はコロナ禍が招いた特別な事例に焦点をあてた報告ではない。

## 2. 静岡県立大学の状況

まず、静岡県立大学は国際化教育という点でどのような状況にあるかを簡単に記す。静岡県立大学は、文系理系 5 学部からなる、学生数約 3000 人の小規模大学である。留学生は毎年 100 人ほど在籍しており、アジアからの学生が殆どを占める。協定校からの交換留学生はアジア圏内にとどまらないが、その数は年間を通じて 10 名前後と少なく、語学研修を目的とした短期留学生は受け入れていない。つまり、留学生との交流を軸にした学生間や授業内の交流という意味では、本学は豊かな環境にあるとは言えない。特に COIL 型教育は、留学に出発する前と帰国後に付加して組み合わせることで留学の効果増大が期待されるが、本学ではまだその導入にいたっていない。

本学の授業形式は、語学以外の授業は殆どが日本語で行われ、留学生も日本人学生と一緒に日本語で授業を受けるのが原則である。ただし、教養科目を中心に英語でとりおこなわれる授業群がいくつかあり、興味があれば誰でも受講することができる。COIL 型教育を考える上でこのような科目は重要であり、実際にこの科目を利用する形で US-COIL が一部行われている。しかし、英語による授業数も、実際に COIL を導入した授業数もまだ限られているのが現状である。

このように、交換留学生や英語による授業の数をみると、COIL の拡充という点で本学の状況は明るくはないように見える。しかし、国際化教育のための資源が豊富でなければ COIL を始めることが難しく、その後の発展は期待できないと落胆するのは性急であろう。それぞれの大学に合った COIL のとりくみ方があり、実際に行われる COIL の内容は一律ではないはずである。以下では、静岡県立大学が行っている日本語 COIL と国内 COIL に焦点をあてて報告する。日本語 COIL とは、必ずしも英語を使うことにこだわらず、日本語も併用しながらの（または日本語のみを用いての）COIL 型教育である。国内 COIL とは、パートナー校を国内に求める COIL 型教育のことである。もちろん、本学では日本語 COIL と国内 COIL にしか目を向けないということではなく、英語やその他外国語による“通常の”COIL と平行して行うということであり、そのような US-COIL の活動例も最後に報告したい。

### 3. US-COIL の形式

#### 3.1 US-COIL の考え方

COIL をどうとらえるかによってそのとりくみ方は変わる。狭義でとらえるなら、2 国間で授業を履修する学生が ICT 技術を用いてディスカッションやグループワークなどの協働学習を行い、最終的には共同発表やポートフォリオの作成といった一定の成果につながるような授業活動を指すことになるだろう。しかし、静岡県立大学では COIL をより広義でとらえ、協働作業の深さやそのあるなしを問わず、ICT 技術を用いて学生の国際交流が見られれば COIL が行われたと考える。授業提携は一回限りの単発イベントでもよく、または授業の枠を飛び出た交流でも構わない。その上で、複数回にわたる連続性があり、学生間の自発的な協働作業を含み、そして Zoom や skype などによる同時性が加わっていればなお良いとする考え方である。

さらに、パートナー校を必ずしも海外の大学に固定せず、国際的な交流が担保できるのであれば国内の大学を相手校に選んでも、また日本語を主に用いた交流活動をも COIL 型教育のひとつのあり方として推奨している。

表 1 静岡県立大学における US-COIL 実績表

番号	部局	本学授業名称	相手校	同時性	内容	開催時期	日本語 COIL	国内 COIL
1	全学共通科目	Japanology	UCD	同時	ワークショップ	2019.6		
2	全学共通科目	Japanology	複数大学	同時	講義	2020.6		
3	看護学部	最新看護の動向	複数大学	同時	発表	2019.11		
4	看護学部	国際保健・災害看護論	複数大学	同時	講義	2019.5 & 2019.7 & 2020.7		
5	看護学部	国際看護論	UP	同時	講義	2019.1		
6	大学院薬食生命科学総合学府	生体情報分子解析学特論・先端医療薬学特論	UCD	同時	講義	2019.6 & 2020.6		
7	国際関係学部	日本語学演習	UNCC	非同時	双方向交流	2019.10-11	○	
8	国際関係学部	日本語表現法	UNCC	同時・非同時	双方向交流	2020.1-4	○	
9	国際関係学部	日本学研究	GU	非同時	双方向交流	2019.10-11	○	
10	国際関係学部	日本語表現法	三重大学	非同時	双方向交流	2020.7-8	○	○
11	全学共通科目	Japanology	上智大学	同時	講義	2019.6		○
12	非授業	静岡スタディツアー	上智大学	同時	講義・研修旅行	2019.8 & 2020.2		○

UCD: カリフォルニア大学デビス校      UP: ポートランド大学  
 UNCC: ノースカロライナ大学シャーロット校      GU: ゴンザガ大学

表 1 は、これまでに行われた US-COIL を一覧にしたものである。日本語 COIL と国内 COIL にはそれぞれ○を付してあり、三重大学と行った表中の 10 は、日本語 COIL と国内 COIL の両方の特徴を備えてい

る。それ以外のものは“通常”COILである。<sup>4</sup> ことさら区別しているわけではないが、本学には通常COIL、日本語COIL、国内COILの3つの形が混在している。

### 3.2 日本語COIL

日本語COILとは、英語と日本語の両方を用いた授業提携（表1の7から9）と、日本語のみで行われる授業提携（表1の10）の両方を指す。英語と日本語の両方を用いた活動は、専ら米国の日本語授業をパートナーとしている。

例えば、表1の7は、本学「日本語学演習」（3年生以上）と、米国ノースカロライナ大学シャーロット校（UNCC）の日本語授業（2年生）との間で行われたUS-COILである。ここでは、「パートナー校について知る」という共通のトピックを定めて、グループに分かれて日米間で情報を交換しあった。情報交換のために約4週間が設けられ、学生達は使用言語を英語と日本語で週毎に交替させて、メーリングリスト（文字・画像共有）やソーシャルラーニングシステムのFlipgrid（映像・音声共有）を通して交流を続けた。その後、パートナー校について知り得た情報をもとに各大学がプレゼンを準備し、実際に発表した動画を互いに視聴するところまでを授業提携として行った。米国の学生にとっては、日本の大学生と日本語で交流することが授業の目的にかなうことであった。また、本学の学生は、英語を用いてコミュニケーションすることとは別に、UNCCの学生が発した日本語を観察し、それが第二言語習得論の文献で紹介されている事例と合致しているかどうかを検証するという課題にとりくんだ。つまり、本学の学生にとっては、英語で交流することも、日本語で交流することも、どちらも意義のある活動であったといえる。<sup>5</sup>

この他には、表1の8のような、本学「日本語表現法」（1年生）と米国UNCCの別の日本語授業（2年生）との活動がある。ここでは、双方の学生でペアをつくり、メールやskypeを用いて交流したが、使用言語は日本語のみでも、日本語と英語の両方でもどちらでも良いとして学生自身に決めさせた。本学の「日本語表現法」という授業は英語学習を目的としておらず、学生が参加しやすいように使用言語を学生の判断に任せたのがその理由である。さらに、英語はまったく介在させず、日本語のみで行われた三重大学とのUS-COILもあるが、これは次節で説明する。

### 3.3 国内COIL

国内COILとは、パートナー校を日本国内の大学に求める授業提携を指し、表1の10から12がそれにあたる。US-COILではこれまで、三重大学と上智大学に留学中の学生との交流を行ってきた。例えば、表1の10は、本学の授業「日本語表現法」と、三重大学の留学生用の授業「日本事情」との間の

<sup>4</sup> 日本語COILや国内COILと対比させるために、便宜上本稿では「通常COIL」と呼ぶ。日本語COILや国内COILが「通常」ではないという意図からではない。

<sup>5</sup> 本活動の成果は、米国の学生の視点から見たものが2020年2月にメンフィス大学で開催された「Annual Southeastern Association of Teachers of Japanese (SEATJ)」において既に発表されている。また、本学の学生の視点からとらえたものは、2020年12月に開催の「第3回JAAL in JACET学術交流集会」において発表予定である。

授業提携である。これは、前節で説明した日本語 COIL の特徴も備えており、英語は一切用いず日本語のみを使用しての活動であった。ここでは、三重大学の留学生による音声説明付きのポスター発表を本学学生がネット上で視聴し、コメントを書き込むというものであった。学期末の約1週間の間に集中して行われたもので、このことがきっかけで深い議論に発展することは残念ながらなかった。しかし、本学学生のコメントに対してさらに三重大学の学生がコメントを返したりと、連続したやりとりもみられた。今後やり方を工夫することで、より協働性の高い交流を期待することができるだろう。

この他にも、上智大学に留学中の学生をパートナーとし、研修旅行の事前研修として国内 COIL を組み合わせた事例もある（表1の12）。これは、静岡スタディツアーというとりくみで、本学学生と上智大学の留学生と一緒に静岡県内の企業を訪問し、2泊3日で静岡の産業について学ぶという体験型学習である。授業提携ではないが、ツアーの開始前に参加者は Zoom でつながり、静岡の産業について講義を受けたり意見交換をするといった機会が設けられており、この部分が COIL に相当する。<sup>6</sup>

このような国内 COIL の実践は、多くの留学生でキャンパスが賑わうような大学にとっては意義を感じにくいかも知れない。しかし本学は、2節で述べたように留学生の数も出身国の数も限られているため、学内で多様な留学生と交わる機会が豊富にあるわけではない。そのような環境にあって、国内の他大学に在籍する留学生と交わる機会を持つことは、本学学生にとっては刺激的であり益も大きい。こういった点において、国内 COIL は今後の可能性を秘めているといえる。

### 3.4 通常 COIL（4校同時参加の実践例）

最後に、通常 COIL の実践例は、表1の1から6が該当し、日本語 COIL や国内 COIL の実践例よりも数が多い。ここでは、本学を含め4つの大学を結んで授業を行った例を紹介する（表1の3）。<sup>7</sup> この US-COIL は、2019年11月に、本学と上智大学に加え、ポートランド大学（米国）と国立ドルノゴビ医科大学（モンゴル国）の4大学をつないで「若者への性教育」というトピックで授業を同時開催したものである。まず各大学の学生代表者がそれぞれ口頭発表を行い、その後質疑応答などのディスカッションに移るという2部構成で、看護学部生59名と教職員32名が参加した。各大学の発表やその後の議論は、各国の出生率、中絶率、避妊の方法と費用、性感染症、法的整備といった話題に及び、国を越えての違いや類似点が浮かび上がる興味深い展開となった。1回限りの単発イベントではあったが、数ヶ月の準備期間を費やしての合同授業であったことに、学生と教員双方の満足度は高かった。特に、看護学部のような実習教育の制約が高い学部では、在学中に長期の留学を行うことが難しいといわれる。そのような中で国際的な授業交流の実践ができたことで、カリキュラムの性格上自由に留学を計画しづらい部局にとって US-COIL の利点が高いことが示された。

<sup>6</sup> 静岡スタディツアーについては、関西大学発行の I-PAPER（2020年9月号）でも報告されている。

<sup>7</sup> このとりくみは、2020年2月の「6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (WANS)」で報告され、『看護教育』（2020年5月号）でも紹介されている。

その他の US-COIL では、「Japanology」という全学共通の授業において、静岡の特産である日本茶のワークショップをカリフォルニア大学デイビス校（UCD）とで同時開催したものがあつた（表 1 の 1）。日本茶の種類と性質について学びながら、双方の教室で講師の指導のもとお茶を淹れ、茶葉の種類と淹れかたにより異なるお茶の味を共有した。また、大学院レベルでは、「生体情報分子解析学特論・先端医療薬学特論」の授業の一環として、薬の安全性や心臓病のコンピュータシミュレーションといったトピックで UCD の研究者から講義や発表を聞き、意見交換を行っている（表 1 の 6）。このように、一般教養のレベルから専門性のかなり高い授業にいたるまで、担当教職員の協力と努力により通常 COIL を実践することができている。

#### 4. まとめ

以上、静岡県立大学における US-COIL が、通常 COIL だけでなく、日本語 COIL や国内 COIL とともに進められていることを具体例と共に紹介した。重要なことは、日本語 COIL や国内 COIL は、完成度や充実度が低い当座のための COIL 活動ということではなく、さまざまな COIL のひとつの形として本学ではとらえているということである。

例えば、日本文学を専攻する日本の大学生が、同じく日本文学を専攻する海外の大学生とつながろうとするとき、共通言語が日本語であるのは自然であるし、海外にあって日本語能力の高い非日本語母語話者と接することの意味も大きい。双方の学生が議論を行い、もしその議論に日本の学生がなかなか入り込めないというようなことがあつた場合、その理由は語学力の違いでは説明がつかない。自らのディスカッション能力や議論の方法についての文化差について考える良い機会になるであろう。日本語 COIL の意義と可能性は、南山大学の岩崎典子氏も指摘しており、自身の活動を大学 HP や広報誌で紹介している。<sup>8</sup>

海外ばかりでなく、日本国内の大学との COIL 活動もまた、大きな意義がある。日本に散らばる多くの留学生と意見交換ができることは、たとえ自前で留学生が充分確保できている大学であっても、益のあることである。また、入学した大学で卒業まで過ごすことが一般的な日本の大学では、国内 COIL を経験することにより、国際・国内両方の視点において新しい知識やものの見方に触れることができるであろう。

このように、通常 COIL と共に日本語 COIL や国内 COIL を平行して実践することにより、COIL の可能性が一層広がっていくと思われる。とはいえ、本学の US-COIL の経験値はまだ低く、COIL を取り入れる教員数や授業数を延ばしていくという課題がある。今後も、幅広い実践活動を心がけて、US-COIL の拡充を図っていきたい。

<sup>8</sup> 南山大学 COIL (NU-COIL) の HP における「日本文学演習」の活動紹介 (<https://office.nanzan-u.ac.jp/nu-coil/coil-education/index.html>) や「Nanzan Bulletin (2020年212号)」などを参照のこと。